

ピジン日本語その他資料

責任編集 岡島昭浩

協力 衣畠智秀

大田垣仁 覚野吾郎

鳩野恵介

本資料は、文献と国語史の実態との差を示す述語形式のうち、とくに、アリマス・アルヨ言葉を中心に資料を収集し、編纂したものである。次に利便を図り目次を掲げておく。

1 アリマス・アルヨ言葉

一八六〇年代

1 アリマス・アルヨ言葉

一八六〇年代

一八七〇年代

一八八〇年代

一九〇〇年代

一九二〇年代

一九三〇年代

戦後
年代不明

田舎者言葉

3 2

その他
てよだわ
時代性があらわすサ行イ音便・バマ行ウ音便
博士言葉

エメエ・アンベール『絵で見る幕末日本圖会』（茂森唯士訳、講談社学術文庫）一八六三年一八六四年日本に滞在。オランダ人居留地ベンタンでの日本語の授業について。この例は、柏木隆雄先生（大阪大学大学院教授）のご教示による。

私の召し使いは、トオという名前の若い男の子であつた。多くの日本人がそうであるように、彼は自分の正確な年齢を知らなかつたが、頭の上を剃り上げていないので、彼がまだ少年時代から出でていなことは確かだつた。…中略…私は、最初に、彼から日本語の授業を受けた。彼は、三つの言葉で、会話を理解するための鍵を私に与えた。彼が無意識に、このような程度にまで、哲学の方式にかなつた方法を用いていることに、すべての人が驚くだろうと私は思つた。事実また、すべての知的行動は、疑問と否定と肯定の、三つの最も重要な表現に帰着している。…中略…というわけで、まず疑問か

ら始めて、日本語で、アリマスカ すなわち、有りますか？

を教わり、次いで、否定のアリマセン（有りません）に移

つていき、そして肯定のアリマス 有ります に終わるわけ

てある

その後は、字引が、われわれに必要な言葉を教えてくれる。

例えは、二ツボンは日本または日本人。チ(ヒ)は火

チコは茶では黒ミスは水太君は小船または船キノカ（アソカ）が 戦争等マジである。 中略

しに説明することができた。例えば、かなり長い間留守した

あとで、家に戻つて来た私は、トオにお茶を持つて来させぬ

ため、「チア、アリマスカ」というと、彼は「アリマス」と

答えて、まもなくすると、お茶はもう私の前の机の上に置かれていた。

れている。私が、警報が鳴っているのを聞いて、火事ではな

いかと思い、「チイ、アリマスカ」と尋ねると、トオは、「ア

「リマス」と答える。しばらぐして消火されると、彼が戻って

来て、アリマセジ」という快報を私は伝える

(八五 八七ペ)

嘶しするよろしい。どんぢや／＼とめうかんどん、ちゃんき
うらう／＼きうらんほこりん、すいらくちうちやあらりふう
らりめう、けん／＼さいはいちゑすつぱあ、からころ／＼ち
くりんたい、ぱあぱあ。はゝゝゝゝゝ、大さん可笑い、はゝ

۱۱۱

これ可笑くない、あなた馬鹿、はゝゝ。

河竹黙阿弥・月宴升程栗（一八七二年一〇月初演） 黙阿弥
全集第十卷 「唐人」の言葉のみを以下に抜粋。

一八七〇年代

あなた目ない、馬鹿々々々々。

卷之三

々それ見るあります。

私利口、あなた馴鹿々々。

あなた踊るよろしい、私大さん見たい。

大さん嘸し面白い

おへ、あつます／＼

分りませんよろしい、今の嘶し私寐言。

『北』あなた、いつしょに、ありがたう。 (同)

『弥』わたくし、まことぢりぬまう、ない。 (一五四ペ) (同)

あなた馬鹿、はゝ。

『さ』アヽ、たいさん、どりんけん。君マア、重かさね杯かさねたまへ。 (二五ペ) (同)

仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』 (一八七〇 七六年) (岩波文庫・上巻 一一三七 一二三八ペ) 会話中の『』は話者に関する私(情報提供者・飯間浩明氏)の補い。弥次郎・北八・英人モテル・ざんぎりなど。

俗間横浜語と号へ、「あなた」「おはやう」「わたくし」「たいさん」「よろしい」「まはろ／＼」などいへる。「」は洋人ようじんと贈答の階梯かいていにして、内外必用の語なれば、本文中ほんもんちうもつぱら専に用ひたり。甘口なること、推て知るべし。

『弥』こんべいに通次郎 北八、さらんぱア、ペケ／＼。 (同) (同)

『モ』あなた、ちやがちやぶ喰事くわうじあります。 (同) (同)

『弥』わたくし、空腹くうふくあります。 (同) (同)

『モ』此店こゝ、甚廉價まことやすい。 (同) (同)

『弥』よろしい／＼。 (同) (同)

『弥』モシ、あなた、どろんけんありますか。わたくし、どろんけん／＼。 (同) (同)

『モ』わたくし、どりんけん、たいさん、あります。 (同)

(上・一九ペ)

『モ』日本、おはやう。

(同)

も、まはろ／＼も、わからねへ。(上・七ペ)

『弥』彼奴きやつ〔モテル〕は、此地の様子も知つてゐるし、濱にゐたときも、港崎ながで毎晩まはろ／＼と、きめかけて、

(上・一九ペ)

『モ』日本、おはやう。

(同)

『モ』あなた、まはろ／＼。どちら。わたくし私今ばん、

パリトリツチ。稚子ゴン。小銃エーム。 (一四五ペ)

(五七ペ)

『弥』ヨイ、モテルさん。あでんむすめ亜丁娘あでんむすめ、助兵衛すけべゑあります。 (二二ペ) (同)

『モ』むしゆめ、助ベゑ、たいさんあります。 (同) (同)

『弥』あなた、わたくし、すけベゑまはろ、まはろ。 (同) (同)

『モ』よか／＼。 (同) (同)

『弥』こんべいに通次郎 北八、さらんぱア、ペケ／＼。 (同) (同)

『モ』あなた、ちやがちやぶ喰事くわうじあります。 (同) (同)

『弥』わたくし、空腹くうふくあります。 (同) (同)

『モ』此店こゝ、甚廉價まことやすい。 (同) (同)

『弥』よろしい／＼。 (同) (同)

『弥』モシ、あなた、どろんけんありますか。わたくし、どろんけん／＼。 (同) (同)

『モ』わたくし、どりんけん、たいさん、あります。 (同)

語で写されている。

仮名垣魯文『安樂樂鍋』三編下（一八七二年、岩波文庫一九六

七）

「異人」^{アリ}あなた、異人、ペケありますか。わたくし、あなた、たいさんよろしい。ト、チヨイと私の手をにぎつたので、私もぽつとしてしまツてサ。「茶店女の隠食」原文旧漢字】

（一〇一ペ）

阿弗利加人のダイインスなりけり……
旦那^{だんな}私^{わたし}し責^{あなた}郎^{しか}叱^{はな}りますない私^{わたし}し話^{はな}し致^{いた}します旦那^{だんな}叱^{しか}るあり
ますか私^{わたし}し泉^{いづみ}さん助^{たす}けて貰^{もら}ひました（中略）お嬢^{じやう}さま願^{ねが}ひます私^{わたし}し悪い事^{悪いこと}するない御詫^{あわび}私^{わたし}し願^{ねが}ひます旦那^{だんな}何ぞ私^{わたし}し悪いない一日^{いちにち}でも半日^{はんにち}でも一遍^{べん}私^{わたし}しお邸^{やしき}帰^{かへ}るあります、何うぞ帰^{かへ}る……願^{ねが}ひ……願^{ねが}ひ……ます……、嘘^{うそ}つきませんマホメット誓^{ちか}ひます、誓^{ちか}ひ……誓^{ちか}ひ……天罰^{てんばつ}……天罰^{てんばつ}……。

（第五回（末尾））

岡本純『外客交際 連西の手ぶり』（一九七三年）青山堂『明治事物起源』による（石井研堂『明治事物起源』）
治事物起源』「横浜言葉」による（石井研堂『明治事物起源』）
ちくま学芸文庫）。

外国人に対話するに、其語の通せざらんことをいとひて、当時横浜言葉と称する デキノヽタイサン等の語を云ふ、
片語を以て説話する者あり、外国人の方にては、此詞を甚だ嫌ふ事なり

（三三四 三五ペ）

陳3「浮田さん何を考^{かんが}へます私^{わたし}し来ました腹立^{はらたて}ましたか
御相談^{じやうあんたん}には成^{なり}ますまいが外事^{ほかごと}なら話^{はな}して御覧^{ごらん}なさい。「何ん
な事^{こと}ありすか私^{わたし}しお使^{つか}ひ致^{いた}しませう。……
私^{わたし}し分^{わかれ}るない責^{あなた}下^{どこ}何處^{へや}へ遣^{へんじ}る返事^{へんじ}です郵便^{ゆうびん}電信^{でんしん}伝話^{でんわ}機^機幾千
も有^あります。……
「宜^{よろ}しい男^{をとこ}なら書物^{しょもつ}を返^{かへ}しますネ、其^その中^{なか}へ手紙^{てがみ}を入れま
せう屹^きと人が氣^きが着^{つき}ません、女^{めん}ですか花簪^{はなはんざし}児^こを進^{しんじゅう}上^ありま
す薔薇^{しゃうび}の花^{はな}へ紅^{べに}で真^{しん}のやうに小^{こま}かく書^{かき}ます大丈夫^{だいぢやうぶ}向^{むか}ふの人気^{ひとき}
が付^つきませう何^{どう}です。……
「ハヽア夫^{おとこ}困^{こま}つたエーツとー。……
「アヽ爾^{さう}だ^な／＼貴^{あなた}下^あります／＼
「有^あります／＼大層^{たいそう}宜^{よろ}しいモウ此外^{こし}有^あません。
「貴^{あなた}下^ありますまい私^{わたし}未^まだ言^{いひ}ません、鳩^{はと}々鳩^{はと}より外^{ほか}有^あり
ません私^{わたし}考^{かんが}へました鳩^{はと}宜^{よろ}しい、宜^{よろ}しい鳩^{はと}。……

一八八〇年代

須藤南翠『新粋之佳人』（一八八七年）日本現代文学全集三
政治小説集 講談社 第七回は、中國語による独り言。文

「私し考へました大丈夫宜しい有りませう御礼おれい沢山貴下吳あなたくれますね工貴下。……」

「彼なり／＼浮田の側かたらに飾かざりありしは全く彼の旗章フラグなり然れば何人をか伴ともなひて人目稀なる空中の会合くわいがふを語らひけるよ益々不問には措をかまじ／＼ト支那語しなごを以て独語ひとりごちしが

(第七回)

ピエール・ロチ「江戸の舞踏会」「秋の日本」村上菊一郎・吉水清訳(角川文庫、一九五三)

・ソーデスカ伯爵夫人
・アリマセン侯爵夫人
・アリマスカ嬢
・カラカモコ嬢
・クーニチワ嬢。

「わたしは登場人物の誰をも傷つけないよう、ムツヒト天皇の御名以外は、すべての名前を匿名にした。」(七三ペ)

中村春雨(吉藏)「無花果」(一九〇一年)『現代日本文学全集』三四 歴史・家庭小説集 改造社による

日本人牧師と結婚して日本に来る米国女性、「あの、私の日本語、日本人が聴くと可笑をかしいでありますかね、思ふ事、向むかうの人に分明はつきりませんかね。」

「私は良君あなたが日本へ行ほんつたら日本語ばかり使ふよろしくと仰おつしやりましたから、それで可成左様さうしてゐますが、外の日本人、解わかるまいか思ひましてね……」(三六三ペ)

「私は良君あなたの命令めいれいなさる通り、遣おもつて行ゆかう思ふのであります。」

「料理番コックも、婢メイドも、そんなもの入りません。私一人で遣わたりります」

「否いや、私は遣わたりるあります。父おやさんもその事こと、何時いつも云はれたりります。料理番コックなんか置かないやうにするよろしいつてね、それで私、平常ひごろ家うちでも庖厨くりやの方の事、手伝うたのでありますよ。」

「あの、良君あなたの親さんや、姉ねえさんに、私は早はやう逢あひ度たいでありますよ……私は米国人アメリカ人だから、嫌きらはれる事ことありますまいかな。」(三六四ペ)

「良君あなた、私を愛あいしてくださるありますか。」(三七七ペ)

などとしゃべるなどの発話が見られる。また、乞食の少年の「何か違つてくんねえ。今朝から飯一粒も食はねえんだから、腹が減つちゃつて歩けねえんだ」、「己等の父ちゃんも阿母も去年虎列刺（コレラ）で死んぢやつたんでえ。」などもあり（三七七ペ）

より専門家ではないが、写真道楽の腕自慢から、喜んでシマダにいろいろの技術を教えた。シマダも器用でよくおぼえた。その以上のことは、ヘンリーの日本語が不完全のために詳しく述べ判らなかつた。

一九二〇年代

岡本綺堂「雪女」（一九二一年）『子供役者の死』隆文館、引用は光文社文庫『鷺』。

岡本綺堂「蟹のお角」（半七捕物帳）一九二〇年、『講談俱楽部』一月号

「遠いあります」

岡本綺堂「異人の首」（半七捕物帳）（一九二一年）『週刊朝日』一〇月号

「それ、フォト……。おお、シャシンあります」と、ヘンリーは答えた。……

「ハリソンさん、シャシン上手ありました。日本人、習いに来ました」

「その日本人はなんといいますか」と、半七は訊いた。

「シマダさん……。長崎の人あります」

「年は幾つですか」

「年、知りません。わかい人です。二十七……二十八……三十……」

だんだん訊いてみると、そのシマダという男は長崎から横浜へ来て、写真術を研究しているが、日本人に習ったのでは十分の練習が出来ないというので、何かの伝手（つて）を求めてハリソンの家へ出入りするようになつた。ハリソンは商人で、もと

ロイドは片言（かたこと）で云つた。

「日本人、嘘云うあります、わたくし堪忍しません」「なにが嘘だ。さつきからあれほど云つて聞かせるのが判らねえのか」

「判りません、判りません。あなたの云うことみな嘘です」と、ロイドは激昂したように云つた。

「あの品、わたくし大切です。すぐ返してください」

二月 初版目次に「山男の四月（一九二二年四月七日）」
とあり

支那人はそのうちに、まるで小指ぐらいあるガラスのコップ
を二つ出して、ひとつを山男に渡しました。

「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。の
むよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、
お茶のむ、毒のまない。これながいきの薬ある。のむよろし
い。」支那人はもうひとりでかぶつと呑んでしまいました。

井筒月翁『維新侠艶録』（一九二八年・一二月）中公文庫、一
九八八 井筒月翁は、解題にはないが、小野賢一郎『燕子（一
八八八 一九四三）』のこと。

「あれ、誰ありますか」

「家老です」

「おかしい服ありますね」

「あれは日本の礼服です」

サトーと伊藤とはこんな会話をした。（七九ペ『会話篇』）

白井喬二『富士に立つ影 明治篇』『杉浦美佐緒 七』（一九二

七年？）『報知新聞』時代小説文庫による

「私、ダラス先生あります」

「……ほう、おとなしい娘さんある」

一九三〇年代

海野十三『人造人間エフ氏』（一九三九年）青空文庫カードに
よる

『戊辰物語』（一九二八年）『東京日日新聞』、同年万里閣書房
刊。岩波文庫による

イワノフ博士「……ましえん・マリ子ちゃん・くださーいま
した・あれは人造犬あります」

中国人の張「ほんと、あるな。では、いう。わたし、あの子
供にたのまれた」……「いや、あの子供、わたしにたのみま
した。わたし、けつしてうそいわないと」

口の悪い英國公使パークスが「こんな粗末な紙ではすぐに破
けてしまふ」と由利にいった。（中略）公使はウンとうなつ
て、札を力まかせに引き裂こうとしたが破れず、「これ駄目
あります」と投げた。（金子子爵談）

新居格編『支那在留日本人小学校綴方現地報告』（一九三九年）

第一書房

前田 均（一一〇〇三）「七章 在外児童作文集に見る言語混用の実態——日本語と中国語を主にして」小島勝（編著）『在外子弟教育の研究』一一七~一四〇 玉川大学出版部による

すすみだいにおいて「しようがない。」といつて、お金をやりました。 「南満州橋頭・尋三・女」A三五二頁
地元民の「やさいやのにいやん」（野菜売りの「満人」）の話す変な日本語と、それにあわせる日本人の姿がよく描かれている。
次の作文は、「国防献金」のために古雑誌を売る話。

： 今日は、新居格編『支那在留日本人小学校綴方現地報告』一九三九（昭和一四）年、第一書房、本章での略称A、在満日本教育会『皇紀二千六百年記念 全満児童文集五・六学年』一九四〇（昭和一五）年——略称B、のみ確認することができます。（一一九 一二〇ペ）

僕達は（中略）ボロニーヤンをさがして僕の言えまで引張つて来て僕が、「たくさんある。高く買ふよろしい」といひながら、ニーヤンに雑誌をみせると、「ハヲハヲ」といつてばかりではかつてから（中略）「トントンでこれだけ」といつて五十五銭出しました。

〔奉天省營口・尋四・男〕（A三七九ペ）

： 一方で、地元民の話す変な日本語を記録した作文、また、地元民相手には日本人もそのような変な日本語を使う場面を記録した作文がある。

きのふ、やさいやのにいやんが来ました。（中略）おかあさんは「きうりをかはうか。」といひながら、お外へ行きました。にいやんは「おくさんきうりかうよろしい。」といつて、きうりをいじつてゐました。おかあさんが、きうり二本かつて「二本なんせんかね。」といひながら、おうちへかへつて、お金を持って来ました。にいやんは「二十せんです。」といひました。おかあさんは「たかいたかいしようしようまけるいいよ。」といひながらあかちゃんを、

インド人やしな人も、日本ごをはなす人がありますが、まんがの本のやうないひ方をするので、おかしいです。

〔上海・尋一・男〕（A一六ペ）

「まんがの本のやうないひ方」とはうまい表現である。当時も「まんがの本」の外国人はきっとこんな日本語を話したのだろう。それは最近まで続いていた。

(二二四 二二五ペ)

戦後

豊田有恒『分身』『夢の一 分間』(一九七九) 講談社文庫

外人みたいなアクセントで聞きあほえのない声だった。……

「わたし、あなたの子孫。三十世紀からきたことがある」

(九八・九九ペ)

かぎらない。最近きいた話によると、アメリカの南部やラスベガスあたりの寄席で、その種のジャバーブ・イングリッシュの口まねが、寄席芸人のギャグの一つになっていて、カタナモテクル、ヨクキレルアルナ、ソレノムワタシハ、シヌシナルヨ式の日本人英語が、お客様の腹の皮をよじらせているということである。

安田敏朗『帝国日本の言語編制』(世織書房、一九九七)

この種の日本語の変化の例として、若干不適切であるが、台湾での「内地人中流家庭の夫人と、本島人野菜行商人との会話」として台湾の日本人教師が作文したものを作成して見よう。

「リーヤ(汝)チレ(此)幾ラアルカ」

「チレ。一斤十五錢アル」

「タカイタカイアルネ、マケルヨロシイヨ」

「タカイナニヨ、オツサン(奥さん)口コモ(何處も)十五錢

アルヨ、アナタ、ワタシ、ホーユー(朋友)アル、ヤスイアルヨ」

「ウソ言ヒナサイ。ドコノ野菜屋モ十一錢アルヨ、リーノ

モウ買ハンヨ。外ノ買フ カライランヨ」

「ホー、ホー、ヨロシ、ヨロシ、オツサン、マケルアルヨ。

イクラ買フアルカ」

(川見一九四一、三四)

日本人が外国語を、得意になつて、しゃべつたりする時だつて、むこうの人間がきいたり読んだりすれば、テチナヤルヤル、ミナクルヨロシ式の、きわめてチンケなものになつてゐるかも知れない。英語にした所が、うろおぼえで、アメリカ南部なまりと、スコットランドなまりと、ロンדוןなまりと、中世風英語や雅文体とを、ごちゃまぜにつかつていなくても

と、日本語がベースの文例が載せられている。石剛[一九九三 a、b]においては、この例を引いて「満洲」の「協和語」との差(日本語ベースか中国語ベースかの違い。第三部参照)を論じているが、そもそも台湾のこの例文は川見が述べるよに典型として作文されたものであって、実際に採集されたものではなく、そこに日本側のステレオタイプ視が存在しないとは言い切れない。ことに「コレヤスイアルヨ」などという表現は「中国人の話す典型的日本語」のステレオタイプとして現在も有効であり、……(三八二ペ)

川見駒太郎[一九四二]「台灣に於て使用される國語 の複雜性」『日本語』一二巻三号、三三一・三九頁
石剛[一九九三 a]「ポスト植民地主義と日本の言語学 的状況」『現代思想』一一巻七号、一九六一〇八頁
石剛[一九九三 b]『植民地支配と日本語』三元社

年代不明

『商人獨通詞』(静嘉堂マイクロフィルム)日本英学資料集成
年代不明()

「日本詞で異人へ通ずるつかひよふ」

「男装婦人」一九一六年八月一四日

いねといふ事 又はわるいといふ事 ヘケ

おこるとき あたまたたく ポンコツ シンジヨウ

おまへといふ事 アナタ
かねくれといふ事 壱分シンジヨウ

おまへよろしい アナタヨロシイ
あるじを ダンナ

人の女房を カミサン
わかい女を ムスメ

仕 = 物よいを タイサンヨロシイ
よそへゆくを マロマロ

盗人を ドロボ

いつでもあいさつを ヲハヨヲ
かいりは サイナラ

2 田舎者言葉

薄田泣蘿『完本茶話』富山房百科文庫『完本茶話』・谷沢永一

・浦西和彦(編) 以下、外国人による田舎者言葉の使用。

人出て來た。

この婦人がマサチウセツツの某市なにがしまちへ旅をした事があつた。途中で道を迷つて甚く当惑してゐるところへ、農夫ひやくしやうが一人通りかゝつた。（中略）男装婦人はその農夫ひやくしやうに訊いた。

「一寸お訊ねしますが、某市なにがしまちへはこの道を往ゆきますか。」

「あゝ、おつ魂消たまげた。」農夫ひやくしやうは眼をこすり／＼言つた。「俺おらはあ、何にも知んねえだよ。お前様のやうな女子あまつこみたいな男初めて見ただからの。」（上・一二九ペ）

「石碑と文展」一九一六年一月二五日

百姓が一人通りかゝつた。手には引いたばかりの大根を提さげてゐる。歐陽詢は「一寸……」と言つて呼びとめて訊いてみた。

「この碑は誰の書だね、お前知つては居なからうな。」

「知らねえと思ふ人間に何故聞かつしやるだ。」と百姓は螳螂かまきりのやうに■〔色〕くれた顔をあげた。「これはあ、索靖さくせいといふ偉え方の書だつべ。」（上・一八七）

「戸別訪問」一九一七年四月八日

ルウズヴエルト氏が、ずっと以前一二〇—一〇一紐育州の知事をしてゐた頃、一人の農夫爺ひやくしやうおやぢをよく知つてゐた。（中略）

「よい所へ御座らしつたな、檀那……」爺さんは窓から嚴丈な身体からだを乗り出すやうにして言つた。「ちよつくら檀那にお訊き申すべいが、市の新聞つてえ奴は、えら嘘吐うそぬくだね。」（中略）

「私たつた今読むだばかしだが、ここにこんねえな話が載つとるだよ。何でもはあ、市の富豪ものもぢが牝牛めうし一匹の画ゑに一万四千弗とか払つたつてこんだ。嘘吐うそぬくにも程があるだよ。」（中略）

「何だつて、檀那様……」農夫爺ひやくしやうおやぢは解りの遅い知事をもどかしがるやうに声を高めた。「なんぼ広い紐育の市まちだつて、聴衆きよしゆうのなかから農夫ひやくしやうらしい人の好ささうな顔をした男が一があつた。

（中略）

聴衆きよしゆうのなかから農夫ひやくしやうらしい人の好ささうな顔をした男が一

「へへえ、先生様で御座らつしやりますか。」その男は叮嚀に頭を下げた。「私選挙ちふといつでも此方様に投票するだが、今度もまたさせて戴くかな。」（中略）

「先生様のお為めなら、俺わいい、何時いつだつて投票するだと、彼方あつちからも此方こちからも持掛けるんで定めし先生様もお困りでがせうな。」（上・三 四ペ）

「牛の価」一九一八年四月六日

まさか牛乳の絞れねえ牝牛に大枚一万四千弗もおツ投ばり出す
馬鹿者も御座りましねえからな。」（中・五 一ペ）

「さうだなあ……」爺さんはじつと考へるやうな目つきをし
た。「どの女も一年に一人しかよう生まねえだから。」
(中・五六三ペ)

「国旗に接吻」一九一八年四月二二日

サンフランシスコ
桑港には露西亞生れの労働者がたんと居る。（中略）
女はきい／＼した声で突かゝつて來た。露西亞の労働者は呻うめ
くやうに言つた。

「拭いただよ。それが何なんうしただ。」

「お前さん、これを何なんう思つてゐるの。」

「国旗だと思つとるだよ。」

「国旗を何なんう思つてるの。」

「唯の布片きれだと思つとるだよ。」

（中・五 一 ペ）

「子供の少い村」一九一八年六月二一日

フランスは宿の農夫を掴まへて訊いた。「爺さん、この
村では子供は余り居ないと見えるね。」

「居ましねえだよ、孩兒がきは。」爺さんは安煙草の脂臭やにくさい口をして言つた。

「余り生れないのかな。」

「あんまり生れねえだよ。」

「どんな割合で出来てるか知ら。」

「恋と花」一九一八年六月二十五日

「旦那、一体あの梅の樹はどうして呉れるだね。」（中略）
「だつて、お前様、高い金出して、俺がの買取つたぢやねえ
か。」

（中略）

「預かれなら、預かりもしようがの、実が生つたら持つて往
くだかね。」

（中略）

「実は要らねえだつて。百姓は眼みはを港つて不思議な茶道の
顔を見た。

「俺おら実おもが生るから金を貰つただ。花見するだけなら、お前さ
んが幾度來たつて、彼是叱むけ言いふ俺でねえだ。金は返すだ
よ。」

（中・五六七ペ）

「農夫の自慢」一九一八年七月七日

「かう言つたつて、眞実ほんたうにはさつしやるまいがね、俺達の耕
地ちふのは、素晴すばしく大きいもんでね……」とダコタ生れの
農夫ひやくしゃうは厚い唇くちびるをもぐもぐさせながら言つた。「春の初めに
鍬鏁を入れかけて、畦わを真つ直に耕作を済ますのは、丁度秋の

かゝりだよ。帰り途にはそろそろもう収穫をせんならん程作物が大きくなつとるだよ。」

「そんな事もがすでせうな。」と英吉利生れの農夫は態と落つき払つて言つた。「俺が友達が一人印度に居るだが、何でもその話によると、向うでは畠を抵當に借金をしようちふんで、持地をぐるり一廻り検分して帰ると、もう借金の返済期になつるので、いつ迄待つても金の借りやうが無えちふ事だよ。ははは……」

二人は声を揃へて笑つた。暫くすると、ダコタ生れの農夫は少し笑ひ過ぎたやうに、急に真面目な顔になつた。

「そんだら、はあ、丁度俺が娘聟の持地とおつつかつだと見えるだね。」農夫は面と向ふ折には、こつぴどく面當を

言はないでは置かない同じ口で、自慢さうに娘聟の噂を始めた。

「俺が娘聟ちふのは、二週間前に結婚しただがね、その翌朝馬車に乗つて牧場に出かけたもんだ。毎日毎晩持地のなかをとつ走つて、やつと牧場に着いた頃には、もう子供二人が生れとつただよ。」

(中・五八一ペ)

「何故食物が悪い?」一九一八年八月一三日

「でも、お前様、小麦が高くなつたのは、小麦自身が高くなつた訳ぢやござりましねえだよ。」農夫は言ひ訳がましく口を切つた。「あれはその学問の値段が入つて来るからでござります。今時の農夫はお前様方と同じやうにいろんな事を知らなくつちやなりましねえからの。」

「学問の値段といふと。」タフト氏は腑に落ちなさうに眉を顰めた。「そんなものが何だつて小麦や馬鈴薯の値段に影響して来るんだね。」

「だつて考へて御覽じませ。」と農夫は節高な頑丈な手をタフト氏の鼻先きで振りました。「今の農夫は往時と違つて、自分達の畠から上る物の植物学とやらの名前を知らなくつちやなりますめえ。それから浮塵子や根切虫だが、そんなえな無益物の昆虫学とやらの名前も覚えなくつちやなりますめえ。その上に肥料の化学的成分とやらもすつかり頭に入れておかなくつちやなりましねえのだからな。何だつてお前様、それにはみんな錢がかゝりまするだよ。」(中・六七ペ)

「結婚と天国と」一九一九年七月三日

英吉利のグラスゴウにドナルドソンといふお爺さんがあつた。老病で死にかゝつた時、枕もとに嫗さんを呼んで言つた。

「嫗さんや、お前にはいかいお世話になつたの。俺も今度こそはいよいよお迎ひが来たと思ふから、どうせ往かんなるまいか、氣の毒なのは、嫗さんや、後に残つたお前の身体ぢやてのう。」

「何を言はつしやるだ、後の事ハ心配せんと……」嫗さんは悲しさが胸に一杯になつて来る様に思つた。「氣をのんびりと持つてゐさつしやれ、病は氣一つぢやといふ程にな。」「氣安めは言はん事ぢや。」爺さんは枯枝のやうな手を胸さ

きで揮つた。

「ところで、姫さんや、後に残つたお前の身体ぢやがのう、一人暮しも辛からうから、俺に遠慮は要らん事ぢや、いゝ先があつたら片づいての、老先を気楽に暮らす工夫をせんならんぞ。」

「滅相な、何言はつしやるだ。」姫さんは貞操のかたい蟋蟀^{にほろぎ}のやうに悲しさうな声で泣いた。「今さら他へ片づくなどと、そないな事したら、俺^{わし}らあの世で二人御亭主を持つ事になりますだ。」（中略）

「姫さんや、いゝ人があるわい。お前も知つてのあのジヨン・クレメンス爺さんの、あの人かいゝわい。あれは人間が親切な上に、神信心しないさうぢやから、お前が片づくのに説^{あつら}へ向きといふものぢやて。」

「何故の。」姫さんはけげんさうな顔をした。

「考へてみさつしやれ、俺とお前があの世での、一緒になつて居らうと、不信心者のクレメンス爺さんが天国へは上つて来まいからの。」（下・八六ペ）

「胡桃」一九二五年五月六日 黒人から白人へのセリフ。

宮原晃一郎訳、ハウプトマン「鐵匠」第一幕（一九二三年一月十五日）『近代劇大系5』（近代劇大系刊行会）

「嘘はつきましねえ。その墓石^{はかいし}の下で神様と惡魔とが、死人を分けてござるだよ。」（中略）
「わしら先へ帰るだよ。」（下・八六七ペ）

「詩人と百姓婆さん」初出未詳 ヴアン・ダイクが、ある時

南の方へ旅行した一節

「旦那、穢いと言はつしやりますか。その筈だての、俺ら日がな一日すばすばやつてのだからな。」（中略）

「口が臭くたつて構はねえだ。」（中略）

「何を言はつしやるだ。」婆さんはてんで相手にしないやうにせせら笑つた。「俺ら死ぬる時には呼吸を取りますだの。」（下・九六五ペ）

「演説つかひ」初出未詳

黒ん坊の鬚剃り職人は、（中略）

「旦那、ここんところが少し薄いやうだが、こんなになつたのはずゐぶん前からのことですか。」（中略）

「雄弁家だつて。そんなこと知らねえでどうするものか。わしら誰よりもよくあの旦那が演説つかひだつてえことを知つてるだよ。」（下・九九一ペ）

(一一〇〇 一〇三ペ)

三上 於菟吉訳 ソラ『獣人』(一九二三年一月二九日第五版)
改造社(画像) 次の類例多数

秦豊吉訳、ハウプトマン「馴者ヘンシル」第一幕(一九二三
年一月一五日)『近代劇大系5』(近代劇刊行会) 次の類
例多数

所 独逸シユレエジエンのある温泉場の宿屋「灰いろの鶴」
ヘンシエル「それがどうだ、馬といふやつあ空氣を食つて生
きてゐると思ふのか、また運賃を下げやうとしてけつかる。
(略) ヘンシエル「そのせゐで殊に旦那のお耳にやあ酷く
聞えるので」せえませうつて」

(五七〇ペ)

小山内薰訳、ハウプトマン「ハンネレの昇天」第一部(一九二
三年一月一五日)『近代劇大系5』(近代劇刊行会) 次の
類例多数

樵夫「どうもまだ少しも暖かくなねえだね。」(略) 樵夫
「前へ進む」閣下、御免下さいまし。「かく言ひつつ、昔
の軍隊生活の習慣より、額に手を当てて敬礼す」わたくしは、
鍛冶屋に少し用事があつたのであります。わたくしの斧の柄
に金の輪を穿めて貰ひに行つたのであります。(以下略)(長

官を前にしての話し方 引用者) (三四七 三五〇ペ)
(長

大関格郎訳、セント・アーヴン「チヨン・ファーギュソン」第
一幕(一九二五年八月一八日)『近代劇大系9』(近代劇刊行
会) 舞台はアイルランドの「ダウン州に於ける或る百姓家

の台所である」（五三五ペ）「時代は一八八 年の晩夏である」（五三六ペ）。次の類例多数。

デヨン・ファー・ギュソン「見上げずに」大方アンドルーと一緒に野良へいつたんだべ。」
サラ・ファー・ギュソン「ああ、さうだとも、おらさう願ひたいだとも、おら達はよろこびたいだからな。おら達は本当に随分と困つたでな。」

（五三八ペ）

デエムス・カエザー「収穫にはいいだんべいな。「ハナを初めて見たかのやうに装ひながら」ハナさんか？ おら初め來た時は知らなかつただ。いつも御機嫌はいいんだつべね？」

（五五一ペ）

『クルーテイ』（左利き 引用者）・デヨン「（略）おら馬鹿なんだから養老院へ打ち込まれなればならぬいだ！ おらはおらが今より悪ければさうされたんべ！」（以下略）

（五六八 五六九ペ）

三上 於菟吉訳 「ナン・ドイル『白銀の失踪』（青空文庫ライド）（『世界探偵小説全集 第三卷 シヤーロツク・ホームズの記憶』平凡社一九三一）を新字新仮名にしたもの）

そこまで歩いて行くと、厩舎から一人の馬丁が飛び出して来た。

「ここは用のない者の来るところじゃねえだよ」

「いや、ちょっとものを伺いたいのだがね」

ホームズは一本の指をチヨツキのポケットへ入れていった。

「明日の朝五時に来たいと思うんだけれど、サイラス・ブラウンさんに会うにはちと早すぎるかね？」

「ようがしうとも。来さえすれば会えますだ。旦那はいつも朝は一番に起きるだから。だが、そういえば旦那が出て

きましたぜ。お前さまじかにきてみなさるがいいだ。はあれ、とんでもねえ、お前さまからお金貰つたことが分れば、りますが、之れを一ツお願ひしますだ」（略）新婚男「へ」
「そこで御せえますだ」 新婚女「アンアンアンおらこ

第一場 田舎のある駅 新婚の夫婦見送り人共に田舎風のこど。新婚男「あの赤帽さん、ちよつくりニユーヨークまで参りますが、之れを一ツお願ひしますだ」（略）新婚男「へ」
「そこで御せえますだ」 新婚女「アンアンアンおらこ

んな帽子をかぶつて都さあ行くのはいやだあよ、アンアンアンアン」（略）新婚女「だけど都へ行つてよまたみんなに彼んな風に笑はれるだと思ふと、俺らあ悲しくなつて悲しくなつて、アンアンアンアン」 新婚男「あゝいゝだ、ぢやあこうすべエ、都さあ行つたら第一番に帽子屋へ行く事にすべえ、何うだ判つたけエ」 新婚女「（泣くのを止めて）本当にけえ」

（一一一 一二四ペ）

3 その他

てよだわ

「ヂヨン・ファーギュソン」（前掲）

て嬉しどのたまふ紳士もありやに聞く。

紅葉山人「流行言葉」『貴女の友』二十五号（一八八八年六月五日） 山本正秀『近代文体形成資料』に原本の影印あり。
流行といふ事万につけてあるものながら別けておかしく覺ゆるは言葉の流行なり。しかとは覚えねど今より八九年前なんぜんせつ学校の女生徒がしたしき間の対話に一種異様なる言葉づかひせり。

ハナ・ファー・ギュソン「疲労したやうに」長い車は今一二分前行つたばかりよ。私、ねえ、『クルーテイ』ヂヨンに「小路の先きで逢つてよ。そしたら今日は郵便は遅れるつて言つてよ。（以下略）」（五四一ペ）

時代性をあらわすサ行イ音便・バマ行ウ音便

芥川龍之介「奉教人の死」（一九一八年九月一日）「三田文学」第九卷第九号『芥川龍之介全集 第二卷』（岩波書店、一九七七）次の類例多数

嘸しつ賺しつ、さまざまに問ひただいた。（二六九ペ）
日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ
払つたと申す事でござる。（二七〇ペ）

大概かゝる言尾を用ひ惣体のはなし様更に普通と異なる処
なし前に一種異様の言葉と申したれど言葉は異様ならず
言尾の異様なるがゆゑか全体の対話いつこも可笑く聞ゆ。
五六六年此かた高等なる女学校の生徒もみなこの句法を伝習し
流行貴婦人の社界まで及びぬ初めのほどはいつこありしやし
らず今は人も耳なれてこれを怪しと尤事はなくあどけなく

芥川龍之介「きりしとほろ上人伝」（一九一九年三、五月）「新小説」第二十四年第三、五号『芥川龍之介全集 第三卷』次の類例多数

なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。

(三四ペ)

直木三十五『源九郎義経』(改造社版全集第一巻、一九三三年)
鎌田正清が、土の上へ膝と、手とを、突きながら
「勅諭重く候ひまして 頭殿も、再三、お嘆きなされま
いたが」

(ハペ)

末松謙澄『谷間の姫百合』(一八八八年)(画像)
夫人は遮りて(中略)「あの子は詞も変であれば拳動も
不体裁であるし何う見ても紳士の夫人とは見えぬ」(第二巻
第十一回。一六ペ)などあるが、「私しの親の家サ英吉利の
私しの家へ帰れるのサ」(第十四回、五三ペ)程度で、普段
は「虎と申しまして御長家を拝借して居りまする捨蔵の娘で
御座ります」のような話し方。

田山花袋『日蝕の日』(一九二六年)定本 花袋全集 第二十
七巻』(臨川書店、一九九五)

宮野蠻子『大蛇物語』『宝石』(一九五〇年四月)『怪奇・伝奇
時代小説選集(五)』春陽文庫 志村有弘編一 による

次の類例多数

「いや、まだそこにおじやる……。今、そこを出たばかりぢ
や」

(七三三一ペ)

北の国の果て、四方を山に囲まれた此の里は、天高う清らに
澄うで、水の淨さは類ものう、山々は木々の緑を空に靡いて
紫にかすみ、雪を溶かいた水に洗われた処女らの顔は白う清
う輝いて、(以下略)
「乳母や、いすれのお人か見えまらいたげな……」
なれど、常には、千種どのの声があれば、直ちに眼を覚ま
て応うる乳母が、此の夜は、答えはあるか身動きもせいで眠
り込うでいまらする。

(一一七ペ)

小栗虫太郎『人外魔境』(一九四〇年)第六話「ザ・パリモ」(第

片上伸訳『ドン・キホーテ』(一九二七年五月一五日)世界
文学全集四 新潮社
「拙者のやうな武者修行者の義務でもござるぢや」「(一九ペ)

一節「野武士で「Jやれ」」角川文庫（一九七八）より

「やあやあ、そこの旅行隊にもの申す。それがしは、アルシシの“Ghedeb”，山地に屯する野武士の頭領“Carsa Allamayu”と申すもの。Jのほど、旅にて南方へまかり越す途中、御隊をみかけ、「一飯などJう次第でJやれ」」

この“Dergo”とこつのは、日本でいう一宿一飯とこつような意味。とにかく読者諸君は誤解されるJこと思ふが、私はいま、この人物に武家言葉を使わしている。しかしそれは、エチオピアにおいては、けつして不自然ではない。大名あり、槍持、鉄砲、挟み箱をつらねて行列もするし、言葉も、アクセントの入れ方が普通人とはちがう。

(一一四一ペ) が、聞くものがなければ独りで、むゝ、ふむ、といったやうな、承知したやうなことを独り言のやうでなく、聞かせるやうにいつてる人で。母様も御存じで、彼は博士ぶりといふのであるとおつしやつた。(中略)「かういふものぢや、これぢや、俺ぢや。」(略)「えゝ、J、細いのがないんぢやから。」

横田順彌『とつびトッピング』(一九八八年)より「留守番電話」光風社アルゴ文庫

「そなたが、この家の主で、おじやりまするか?」

あつけに取られて居る俺に、男が、どうみても正しくない公卿ことばでいった。整った表情はにJやかで、声の調子もおだやかだった。(中略)
「そつでJやつたか。いやいや、それは、まJとに結構至極。さすれば、これを買っておくんなまし」

男は、後ろ手にドアを閉めると、侍JとまとおJらんJとま

をまぜJゼにしながら、アタッシュケースから取り出し、床の上に置いた。(中略)

「そうだんねん。Jうしてくんはれ」
男が、今度は関西弁でいった。
(一一一四ペ)

博士言葉

泉鏡花「化鳥」(一八九七年四月)『新著月刊』に掲載
花全集 卷三三』(柳波書店、一九四一年) 次の類例多数

「成る程。どうもエライ騒ぎじやつたな。不幸ばかり重なつて……」（中略）「直ぐに今から活動を開始するじゃ」

（五七ペ）

中島敦「文字禍」（一九四一年春？）「文学界」　『中島敦全集 第四巻』（文治堂書店、一九六九）　次の類例多数

「書き漏らし？」冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事ぢや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのぢやわい。歴史とはな、この粘土板のことぢや。」（一八五ペ）